

# 「妖孽寛濶女」典拠考

— 『好色一代女』と『源氏物語』 —

長谷 あゆす

はじめに

貞享三年（一六八六）刊『好色一代女』（井原西鶴作）は、二十四章の短編から成る。本作では、「好色庵」に住む老女（主人公の一代女）が二人の若者に身の上話をするという形式の下、その波乱に満ちた人生が順番に語られていく。

本稿で取り上げる巻三の二「妖孽寛濶女」<sup>わざわいのかんかつろおんな</sup>は、女盛りを過ぎた頃の一代女が大名屋敷に奉公する話である。そこには、大名の奥方が女中たちに嫉妬話を語らせつつ、側室に瓜二つの美人形を攻撃させる「悋気講」の有様が、滑稽かつ克明に描かれている。先行研究では、従来、本章が持つ「武家の内情暴露的性質」に言及するものが多かった。しかし、管見によると、本章には『源氏物語』若菜巻<sup>1</sup>をふまえた趣向が各所に存在し、そ

の翻案にも大いに見るべきものがある。

本稿では、こうした見地から、典拠利用に着目して隠された趣向を読み解き、「妖孽寛濶女」における西鶴の創作方法を考察する。また、そこで得られた知見をもとに、『源氏物語』を素材とする他章との関係性についても言及したい。

## 一 嫉妬する奥方

はじめに、「妖孽寛濶女」のあらすじを確認しておく。

### 《序盤》

武家の表使いとなった私（一代女）は、浅草の下屋敷で女中たちが蹴鞠に興じる様子を眺めていた。夕暮れ時、急に機嫌を悪くした奥方に対し、古参女中が恒例の悋気講（恋

にまつわる嫉妬を語り合う会」を開くよう勧めると、奥方はたちまち浮かれ出した。

### 《中盤》

女中たちが集う中、謎の美女人形を前に愠気講が始まる。三人の女中が嫉妬話を披露して人形を痛めつけた後、私の番となった。そこで「妾を恨む本妻」を熱演すると奥方は大喜びし、人形が恋敵の側室を象つたものだと告白する。すると、そこで突然人形が動き出し、大騒動になる。

### 《終盤》

その後奥方は病に倒れる。人形は焼却されたが、灰を埋めた塚からは毎晩叫び声があると噂が立った。私が殿様に事情を報告すると、殿は女の恐ろしさを実感して側室を国元に返し、奥方との交流を断つた。この一件に懲りた私は奉公を辞め、上方に帰った。

先行研究の中には、本章の内容と似た史実を指摘するものがある。前田金五郎氏は、水野信濃守元知と内室の諍いを伝える巷説を紹介し「殿様の浮気、奥方の強い嫉妬、普通ならば領地に居住すべき国上臈が江戸下屋敷に滞在して居たこと、事件後奥方は「生別れの後家分にならせ給ふ」たこと等々、史実と西鶴の叙述との類似が見られ」としている。

一方、谷脇理史氏は次のように述べている。<sup>③</sup>

読者は時にそのモデルを思い浮かべたりすることもあったであろうが、結局そこで印象づけられるのは大名・旗本という武家階層の愚しさ・可笑しさである。日常生活において威圧する側の武家がかかわれ諷されていることが面白からぬはずはないであろう。

前田・谷脇両氏はモデルの特定が可能かどうかについて見解を異にするが、「現実世界に存在する武家」を意識することでストーリーがより面白く読めると見る点においては一致している。一読しただけでも楽しめる上、現実世界との繋がりを意識するとまた新たな興味が見つかる——これは確かに西鶴作品の魅力の一つであろう。ただし、本章にはなお、先行作品との関連性を手掛かりとした新しい「読み」の可能性が秘められている。そのことについて詳しく述べていきたい。

## 二 「鞠」が示唆するもの

卷三の二の冒頭には次のようにある。<sup>④</sup>

**蹴鞠**のあそびは男の態なりしに。さる御かたに、表使ひの女役を勤めし時、淺草の御下屋形へ、御前様の御供つか

うまつりてまかりしに、広庭きり島の躑躅咲初て、野も山も紅井の袴を召たる女臍あまた、杳音静くつむじに、鞠垣つづしに袖をひるがへして、桜がさね・山越などいへる美曲をあそばしける。女の身ながら女のめづらしく、かゝる事どもはじめて詠めし。（略）女の態にはためしなき事なるに、国の守かみの奥がたこそ、自由に花麗くはれなれ。

この話は、武家屋敷に仕える女中たちの蹴鞠に始まる。本文によれば、男が嗜む鞠を女ばかりで行うのは「ためしなき事」であるという。西鶴は一代女の視点を通してその様子を詳しく描写し「国の守の奥がたこそ、自由に花麗なれ」と続ける。これは、一見自由に人生を謳歌しているかに見える大名の奥方が、実は鬱屈した嫉妬を抱えていることを後で暴露するための伏線と云ってよい。

では、西鶴は、奥方の「自由に花麗」な暮らしを描く上で、なぜ数ある遊戯の中から「鞠」を選んだのだろうか。ここで、次の寄合・付合に注目したい。

- ・「鞠トアラバ、（略）みすのすき影源若菜、ねこの綱同、さくらをわきて同」  
〔連珠合壁集〕二十三・雑物
- ・「鞠―見そめし俵、柏木の衛門」  
〔類船集〕
- ・「猫―鞠の庭、みそめし俵、女三の宮」  
〔類船集〕

右の例からもわかるように、「鞠」は『源氏物語』若菜巻を想起させるものであった。『源氏物語』若菜上では、六条院で若者たちが鞠に興じる中、猫が御簾を巻き上げて女三宮の姿をあらわにし、柏木が恋に落ちる。その結果、若菜下で柏木は女三宮と密通することとなる。「垣間見」は柏木・女三宮・源氏の運命を大きく動かす端緒となった出来事であり、それが「鞠」の場において発生したことは広く知られていた。

そこで『源氏物語』若菜巻に目を転じてみると、「妖孽寛潤女」の後統箇所（註）に、若菜巻をふまえた趣向が多数組み込まれていたことが見えてくるのである。

### 三 奥方の人物造形

前述の通り、「妖孽寛潤女」には「嫉妬する奥方」の姿が大きく描かれているが、『源氏物語』若菜巻にも「嫉妬するヒロイン」が登場する。それは、女三宮の降嫁に苦悩する紫上である。まず、源氏が女三宮との婚儀について紫上に打ち明ける場面を見ておきたい。<sup>①</sup>

〔※紫上は〕はかなき御すさひごとをだに、めざましき物に覚して心やすからぬ御心ざまなれば〔※源氏は〕「い

かがおぼさむ」とおぼすに、(※紫上は)いとつれなくて「哀なる御ゆづりにこそはあなれ。ここには、いかなる心を置奉るべきにか。めざましく、かくてはなど、とがめらるまじくは、心やすくても侍なんを、かのは、女御の御方ざまにても、うとからずおぼしかすまへてんや」と、ひげし給を

(若菜上)

源氏は話を切り出す際、紫上の嫉妬深さを思い起こし、女三宮の降嫁について「どう思うだろうか」と懸念していた(傍線部①)。西鶴当時広く流布していた『湖月抄』では、右の文中で囲みを付した箇所に対し「(細)紫上は、是ほどまでなきこととをだに嫉妬のかたは深き人と也」と頭注を付している。紫上は、明石君や朝顔君に対する嫉妬心を顕わにすることが度々あったが、ここでも、その「嫉妬氣質」が再度提示されているのである。

さて、傍線部①の続きを見てみると、紫上は源氏の予想に反して落ち着いた様子で話を聞き「不快に思うわけがない」(傍線部②)と謙虚な姿勢を見せる。しかし、内心は決して穏やかではなかった。詳しくは後述するが、婚儀が済んで後、源氏を女三宮のもとへ送り出した紫上は、女房たちに囲まれながら、深夜まで物思いに沈む状態となる。また、女三宮との対面前、

紫上は次のようなことを考えてもいた。

(※紫上は)「われよりうえの人やはあるべき。身の程のものかなきさまを、みえをき奉りたるばかりこそあらめ」など、思ひつゞけられて、うちながめ給。

傍線部については『湖月抄』の頭注にも「……(抄)源(※源氏)の思ひ人の中に、今までは我より上の人はなかりし物となるべし」との説が記載されている。紫上は正妻でないとはいえ、源氏に最も重んじられる妻としての矜持があった。それゆえ、源氏が女三宮を正式な妻として六条院に迎え入れたのは受け入れ難いことだったのである。

一方、「妖孽寛濶女」の恪気講では、一代女が「妾を憎む正妻」を熱演した後、奥方が次のようにして美女人形を作らせた真意を明かす。

「それよく、この人形にこそ子細あれ。殿様、我をありなしにあそばし御国本より美女取よせ給ひ、明暮是に惱せ給へども、女の身のかなしさは申て甲斐なき恨み。せめてはそれ目が形を作らせて、此ごとくさいなむ」

奥方は、右の場面で、殿が「我をありなしにあそばし」と憤慨している。本来国元に留め置かれる側室が江戸に呼び寄せられるというのは正室にとつて由々しき事態である。新しく屋

敷に来た恋敵に夫の愛情や正妻の立場を奪われることを懸念し「申して甲斐なき恨み」を持って余す奥方の姿は、紫上の姿と重なり合う。また、前述の通り、紫上は嫉妬心を抱きながらそれを表に見せぬよう努め、賢明に振る舞い続けた。西鶴はそうした紫上の姿を「側室に嫉妬しない」ことを求められる武家の奥方へと転じ、その「秘めた嫉妬」を極端なまでに誇張して、恐ろしくも滑稽な悋氣講を描いてみせたのではなからうか。

#### 四 悋氣講と美女人形

次に、「妖孽寛濶女」の悋氣講についてより詳しく考察してみたい。「悋氣講」とは、妻たちが集まって作る無尺講で、集まれば夫や情婦の不平不満を言い合って嫉妬のうさを晴らしたところからその名がついたという（小学館『日本国語大辞典』）。本章でも「女を遮さへぎて悪わるみ男おとこを妬ねたましく誇こほて。恋の無首尾」を語る場として悋氣講が開催されるが、そこには次のような特徴があった。

- ① 奥方のもとに女中たちが集う
- ② 夜更けまで（夜、長蠟燭の立切るまで）行われる
- ③ 奥方自身は語らず、女中たちが嫉妬話を語る

④ 古參女中二名（葛井の局・吉岡の局）が取り仕切る  
これらは、源氏を女三宮のもとへ送り出した紫上が女房たちと夜更けまで語らう、次の場面を彷彿とさせる。

（※女房たちが紫上の行く末を案じ）おのがじ、うちかたらひなげかしげなるを、（※紫上は）露もみしらぬやうに、いとけはひおかしく物語などし給つ、夜ふくるまでおはす。かう人のたゞならずいひ思ひたるも、き、にくしとおぼして、（略）中務、中将の君きみなどやうの人々、めをくはせつ、、「あまりなる御思ひやりかな」、どいふべし。昔はたゞならぬさまにつかひならし給し人どもなれど、とし比は此御方にさぶらひて、みな心よせ聞えたるなめり。

（若菜上）

ここでは、女三宮降嫁によって紫上の立場が危うくなることを女房たちが嘆くのに対し、紫上は（内心動揺しつつも）知らぬふりで夜更けまで世間話をしていた。また、紫上はあれこれ語る女房たちを苦々しく思い女三宮を擁護するが、中務と中将の君はその配慮を「思いやりがありすぎる」と語る。この二人は長年紫上に仕え、親しみを寄せる女房たちであった。西鶴はこの場面を次のようにアレンジし、奥方と女中らによる「悋氣講」を創作したのではないだろうか。

(1) 「紫上の女房たち」を「奥方の女中たち」にとりなす

(2) 「紫上が女房たちと夜更けまで物語をする」ことを「奥方が女中たちと長蠟燭の立切るまで愔気講をする」ことに転じる

(3) 「嫉妬話をしない紫上」を「嫉妬話をしない奥方」にとりなす

(4) 「紫上の古参女房二名（中務・中将の君）」を、「奥方の古参女中二名（葛井の局・吉岡の局）」にとりなす

また、(3)と関連する点として、「紫上が口さがない女房たちをたしなめる」行為が「奥方が女中たちに口々に嫉妬話を語る」行為へと転じられていることがわかる。こうした脚色のヒントになったのは、若菜下における次の場面だと推察される。

たいには（※紫上は）、れいのおはしまさぬ夜は、よひぬ<sup>①</sup>（※宵居）し給ひて、人々に物語などよませて聞給ふ。「かく、世のたとひにいひあつめたる昔語<sup>②</sup>共にも、あだなるおとこ、いろごのみ、ふた心あるひとにか、づらひたる女、かやうなることをいひあつめたるにも、つるによるかたありてこそあめれ。あやしう、うきてもすくしつる有様かな。〈略〉

（若菜下）

源氏が女三宮のもとを訪れて不在の折、紫上はやはり夜更け

まで起きて女房たちに物語を読ませていた（傍線部①）。その際紫上は「物語でも、不誠実な男・色好みの男・浮気な男の妻も最後には頼るところがあるのに」（傍線部②）と我が身を嘆く。「女房たちが『不誠実・女好き・浮気性の男』が登場する物語を読み、紫上がそれを聞く」という構図は、愔気講で「女中たちが『浮気男にまつわる嫉妬話』を語り、奥方がそれを聞く」という構図と重なる。西鶴は、このように、物思いに沈む紫上が女房たちと深夜まで交流する場面をもとに、奥方と女中たちの愔気講を描いたのだと考えられる。

では、愔気講に「恋敵を模した人形が登場する」点についてはどうだろうか。「呪詛<sup>③</sup>りん気」（『類船集』）の付合があるように、嫉妬は往々にして呪詛と結びつく<sup>④</sup>。また、人形は呪詛の道具としても用いられた。「妖孽寛濁女」の愔気講では女中たちが次々と人形を痛めつけ、話の終盤には「奥さま御心入ひとつにて。愔気講にてのろひころしける（※側室を愔気講で呪い殺すつもりだった）」とあった。つまり、愔気講に登場した「人形」は、女中たちの嫉妬話をリアルに再現させる道具であると同時に、愔気講が「呪詛の場」であることを読者に印象づける役割をも担っていたと考えられる。

さらに興味深いのは、奥方のモデルと目される紫上が「人形

を好んでいたことである。『源氏物語』紅葉賀には

(※紫上は) ひるな(※雛)をしすへて、そ、きみ給へり。

三尺のみづしひとよるひに、しなぐしつらひすへて、又ちひさきや(※小さい屋) 共つくりあつめて奉給へるを、所せきまであそびひろげ給へり。(略) ひるなの中の源氏

のきみつくるひたてて、内り(※内裏)にまいらせなどし給

として、十歳の紫上が雛遊びに夢中になる姿が描かれている。その没頭ぶりは、侍女の少納言が「ことしだにすしおとなびさせ給へ。とを(※十)にあまりぬる人は、ひるなあそびはいみ(※忌み)はべるものを」と諫めるほどであった。こうした紫上の「人形好き」は、若菜巻にも登場する。

(※紫上は) 宮にも御心につき給べく、ゑ(※絵) などのこと、ひるなのすてがたきさま、わかやかにきこえ給へば、(※女三宮も)「げに、いとわかしく心よげなる人かな」と、おさなき御こ、ちにはうちとけ給へり。(若菜上)

右に挙げたのは、紫上が女三宮と初めて話をする場面である。紫上は、幼さの残る女三宮との距離を縮めるために「雛をいまだに捨てるができない」と話す。それが功を奏し、女三宮は紫上に好感を抱く。また、若菜上には明石女御の出産後、紫上が厄除けの天児あまがっを「御手づから作」る場面もある。『類船集』

「人形」の条に「源氏にあまがつといへる婢子人形ハウコをいふにや。雛ヒナも人形の類なるべし」と説明される通り、これらは紛れもなく「人形」である。『二代女』の読者が「嫉妬する奥方」のモデルとして紫上を連想し、紫上が「雛人形を捨てられない」と優し気に語っていたことをイメージすると、「恋敵そっくりの人形を女中たちに攻撃させる」遊戯は、より一層衝撃的なものに映るだろう。紫上が好んだ「人形」を奥方の呪詛道具へと転じ、典拠のイメージを覆すことよって読者の笑いを誘発する――それが西鶴の狙いだったのではなからうか。

## 五 美女人形と側室

このように考察を進めていくと、美女人形に「女三宮」の傍があることも見えてくる。まず、美女人形が初めて登場する場面を参照しておく。

しだれ柳しだれりゅうを書し真木まきの戸を明あけて、形を生移しなる女人形取出されけるに。

愔気講の開催時、美女人形は「しだれ柳」が描かれた戸を開けて取り出されている。西鶴はなぜあえてここに「しだれ柳」という意匠を配したのだろうか。『源氏物語』若菜下には次の

ような箇所がある。

宮の御方(※女三宮)をのぞき給へれば(略)二月の中十  
日ばかりのあをやぎ(※青柳)の、わづかにしだりはじめ  
たらん心ちしで

六条院で女楽が開催された折、源氏は演奏に加わった四人の  
女性たちをそれぞれ花(植物)に例えるのだが、女三宮は傍線  
部のように「青柳が枝垂れ始めた様」と形容されている。美女  
人形が登場する戸に、女三宮を象徴する「しだれ柳」が配され  
ている——これが単なる偶然であるとは考えにくい。

次に、美女人形が「真木の戸を明て」取り出された点につい  
ても考えてみたい。西鶴作品の中には、人形が登場する話がい  
くつかある。そのうち『男色大鑑』巻八の三「執念は箱入の男」  
では次のようにして人形が登場する。

箱に音あつておそろし。され共、きかぬ男ふたとつてみれ  
ば、姿人形の角前髪、いかなる人の作りけるぞ、さながら  
目つき手足の力身、生きたるものと、ごとし。

この話では、宴席に謎の箱が届けられた際、箱の「ふた」を  
取ることで若衆人形が姿を現す。この例のように、人形は箱や  
長持に収納され、蓋を開けて取り出されるのが普通であり、「戸」  
を開けて登場するといった例はない。では、なぜ西鶴は美女人

形が「戸を明て」取り出される、と表現したのでろうか。

ここで、『源氏物語』において、紫上が女三宮との対面を源  
氏に申し出る場面を見てみる。

たいのうへ(※紫上)、こなた(※宿下がりしてきた明石  
女御)にわたりて対面し給ついでに、「ひめみや(※女三宮)  
にも」中の戸あけてきこえん。かねてよりもさやうに思  
ひしかど、ついでなきにはつ、ましきを、かゝるおりに聞  
えなれば、心やすくなあるべき(若菜上)

「中の戸」とは部屋を仕切る戸のことである。紫上は、出産  
のため寝殿の東面に滞在していた明石女御を訪れる折、「中の  
戸」を開けて西面にいる女三宮に挨拶したいと源氏に申し出て  
いた(傍線部)。そして、のち両者が対面を果たす場面(若菜  
上)にもやはり「中の戸あけて」という表現が見出せる。つま  
り、西鶴は奥方と美女人形が対峙するシーンを「紫上と女三宮  
の対面」のパロディとして描こうとしたがゆえ、「中の戸あけて」  
を「真木の戸を明て」ともじり、その戸に女三宮を象徴する「し  
だれ柳」を配したのではなからうか。

なお、美女人形に女三宮のイメージが付随していることは、  
人形を目にした一代女の反応からも読み取れる。

姿の婀娜も。面影美花を欺き。見しうちに、女さへ是に奪



はれける。

右のように、人形を初めて目の当たりにした一代女は、同性でありながら、その美しさに心を奪われている。また、一代女は話の終盤で美女人形のモデルとなった側室本人を見る機会をも得るが、そこでもやはり彼女の美しさに感動し、「女を女の見るさへ眩まばらくなりぬ」という反応を見せている。これらは、若菜上で柏木が女三宮を垣間見し、その美しさに心奪われることを彷彿とさせるリアクションといえる。ここから察するに、西鶴は紫上を滑稽化して奥方を描く一方、恋敵である側室と美人形に女三宮の佛を重ね、「女三宮の垣間見」にちなんだ趣向をもさりげなく本文に組み込んでいたのである。

## 六 悟気講の語り手たち

次に、悟気講に登場する三名の女中について考えてみたい。

第一の語り手について、本文には次のようである。

岩橋いははしどのといへる女臈おんなろうは妖孽まじまじまねく顔形、さりとは醜か

りし。此人に昼の濡事はおもひもよらず、夜よるの契あても絶たてひさしく

右に挙げた箇所について、先学では、醜貌を気にして夜にし

か作業せず岩橋を完成させられなかった葛城神（一言主命という女神）の伝承、「岩橋の夜の契りも絶えぬべし明るわびしき葛城の神」（『拾遺和歌集』一八・雑賀）の和歌などをふまえたものとして<sup>9)</sup>いる。

ただし、「さりとは醜かりし」女性といえば『源氏物語』の末摘花もそうである（『類船集』に「眉目悪一かつらきの神・末摘花」とあり）。末摘花巻で源氏が彼女の醜い容貌を目にして驚愕する場面は有名だが、実は若菜巻にも、源氏が彼女の存在を口にする箇所がある。

「東の院に者する常陸の君（※末摘花）の日比わづらひてひさしく成にけるを、物さはがしきまぎれにとぶらはねば、いとおしくてなん。ひる（※昼）などけざやかにわたらんもびんなきを、夜の間に忍びてとなん、思ひ侍る。人にもかくともしらせじ」と（※源氏は紫上に）聞え給て、いといたくこゝろげそうし給を、（※紫上は）「例はさしもみえぬあたりを、あやし」とみ給て、（若菜上）

源氏は女三宮と紫上の間で思い煩う傍ら、かつての恋人臈月夜のもとへ再び通うようになっていた。それを隠すため、紫上には「常陸の君（末摘花）が長く病を患っているが、忙しくて

見舞いにも行けていない」と切り出し「昼に人目に立つて訪れるのも不都合なので、夜の間にくっそり訪れようと思つてゐる」(傍線部)と話す。しかし、これは浮気を隠す口実にすぎず、実際には昼はおろか夜の間も末摘花のところへ通うことはなかった。愷氣講に登場した岩橋殿について、本文には「昼の濡事はおもひもよらず。夜の契も絶てひさし」いとあつた。これは「岩橋のよるの契も絶えぬべし明くる侘びしきかつらぎの神」という拾遺集の和歌をふまえた表現であつたが、ここには浮気の口実として引き合いに出された末摘花のイメージも重なり合う。

なお、島内景二氏は、一見おとなしく従順に見える末摘花が「からころも」の歌を執念深く何度も詠むところから、その心底に「情念の蓄積」があつたと論じている。また、島内氏は「中世の『源氏物語』の読者は、末摘花に「霊になりうる能力」と「自分の夫やその愛人に崇る能力」とを授けている」とし、室町時代の物語『花鳥風月』の内容を紹介している。この作品には、末摘花の霊が次のようにして自己の妄執を語る場面がある。

冥途にては、愛念の執心の鬼となりて、影のごとくに離るまじき物をとて、なおも御影に立ち寄りけり。(略)空蟬の尼君、数にもあらぬ人までも、さるぞときけば、嫉妬の

心炎となりて胸を焼き、愛年の焔身を焦がす。<sup>1)</sup>

一方、愷氣講の岩橋殿も、夫の浮気相手の家に押しかけ「それはおれが男ぢや」といひさま、かね(※鉄漿)つけたる口をあいて「浮気相手に嘔みついたと語り、美女人形を攻撃する激しい嫉妬の持ち主であつた。この執念深く獐猛な性質は『花鳥風月』に見られるような末摘花伝承のモチーフをもとに造形されたものではなからうか。

次に、第二の語り手について考えてみる。この女中は若い頃「播磨の国明石」におり、姪の婿の浮気を封じるため、姪と婿とを毎晩寝間に閉じ込めたと語る。ところが、その配慮が災いし、絶倫の婿によつて結局姪が衰弱させられてしまったと憤慨する。この女中には特定の呼称が付されていないが、その出身地から『源氏物語』明石巻のもじり」と指摘されている。<sup>2)</sup>この点をふまえると、女中の体験談にあつた「若い男女の情事をお膳立てする」行為が、明石入道のそれと共通していることに気づく。明石巻では、明石入道が仲を取り持ったことで源氏と明石君の間に姪が生まれる。そして、後に姪が入内し皇子を出産するに及んで一族の繁栄は揺るぎないものとなる。こうした「一族の繁栄」は若菜巻で特に大きく描かれることになる。まず、若菜上では、明石入道が姪(明石女御)の出産を知り、この世

に思い残すことは無いとして山に籠ったことが伝えられる。また、若菜下では、源氏が明石女御を伴って住吉参詣を行った際、「よろづのことにつけてめであさみ、よのことぐさにて、『あかしの尼君』とぞ、さいはひ人にいひける」として、明石の尼君（ひいては明石一族）の幸福が提示される。一方、愠気講に登場した明石出身の女中は、姪と婿の仲を取り持ったことで「姪が衰弱する」という先細りの結果を招くことになった。西鶴は、明石出身の女中に「明石入道」のモチーフを付与しつつも、その行為の結果を逆転させ、「悔しがる女中が人形を突き転ばす」展開へとつなげていったと推察される。

さらに、第三の語り手「袖垣殿」にも、『源氏物語』のキャラクターを思わせる要素がある。本文によれば、彼女は「伊勢の桑名」出身で、下女の化粧さえも禁止するほど「愠気」深い性格だという。「伊勢」と「愠気」から想起されるのは、六条御息所である。六条御息所は賢木巻で伊勢に下向し、それ以降「伊勢の宮」「いせをのあま」「いせ人」（須磨巻）、「いせのみやす所」（明石巻）等、「伊勢」を冠した呼称で登場する。また、「愠気―六条御息所」（『類船集』）の付合もある通り、六条御息所は嫉妬から物の怪に変じ、夕顔や葵上を取り殺したことも知られる。さて、六条御息所は濛標巻でこの世を去るが、やは

り若菜巻で再びその存在を取り上げられることになる。

かのは、北方（※葵上）の、伊勢の宮す所（※六条御息所）  
との恨ふかく、いどみかはし給けん程の御すくせども  
の行末見えたるなん、さま／＼なりける。（若菜上）

ここでは、四十賀を迎えた源氏が息子夕霧の成長を喜ぶ傍ら、かつての正妻葵上と六条御息所の確執―六条御息所の物の怪が葵上を取り殺したことを回想している。さらに、詳しくは後述するが、若菜下では源氏が紫上に六条御息所の執念深さを語った後、それを恨んだ六条御息所が死霊となって紫上に憑りつく事件も発生する。六条御息所が「伊勢の御息所」と呼ばれ、なおかつその「嫉妬深さ」が強調されるのは若菜巻において他にない。伊勢出身の嫉妬深い袖垣殿は、愠気講において「こんな姿の女目が氣を通し過て、男の夜どまりするをまかまはぬ物じゃ」と言いながら美女人形を痛めつけるが、こうしたパフォーマンスも、六条御息所からの連想ではなからうか。

愠気講に登場する女中たちは、一読しただけでもその過激な言動で笑いを誘う。しかし、若菜巻との関連性を意識して読み直すと、その登場人物の佛を持つキャラクターが次々と登場する点にも面白さがあったことが見えてくるのである。

## 七 怪異と後日談

ところで、三番目の話し手（袖垣殿）は、後の展開に繋がる伏線としても重要な役割を果たしていたように見受けられる。

愷氣講では、袖垣殿の後に一代女が「妾を恨む本妻」を演じ、愷喜した奥方が美女人形の由来を語る。すると、突然人形が動き出して奥方の着物の袂に「取りつき」、奥方は「病に倒れる」。この流れは、若菜下で六条御息所の物の怪が紫上に「憑りつき」、紫上が「病に倒れる」と一致する。また、愷氣講では奥方が人形から「やう／＼に引わけ」られて事なきを得るが、これは紫上がいったん絶命するも、怪異後「やう／＼いきいで給ふ」（若菜下）ことと対応している。さらに、倒れた奥方は「凄じく口ばしせらるゝ」状態となり、人形を焼いた灰を埋めた塚からも每晚「喚叫」声が聞こえるようになる。これは物の怪の憑代となった童女が「よばひののしる」状態となり、その後も物の怪が「いとつらし／＼となきさげぶ」（若菜下）ことも重なる。このように、人形の怪異場面には若菜巻における「六条御息所の怪異」と共通するモチーフが複数認められる。西鶴は、愷氣講三番目の話し手である袖垣殿に「六条御息所」を想起させる要素を付加しておき、その後の場面に、満を持して「六

条御息所の怪異」を下敷きにした事件を描き出すという演出を意図していたのではないだろうか。

また、もう一つ興味深いのは、これ以降奥方が紫上とは逆の運命をたどっていくことである。前述の通り、紫上は嫉妬を表には出さず健気に振る舞い続け、その姿を目にした源氏は紫上への愛を一層深める（若菜上）。また、源氏は紫上が病に倒れた際も懸命に看病し、物の怪の出現時には「うへをば又こと方に、忍びてわたし奉り給」として、紫上を怪異から遠ざけるよう対処していた（若菜下）。一方、嫉妬深い奥方は「申て甲斐なき恨み」を隠してはいても、愷氣講の実態が暴露された結果、殿の愛情を完全に失う羽目になる。一代女の報告後、殿が見せた対応は次の通りである。

「女の所存程うたてかる物はなし。定めて国女（※側室）も其思ひ入（※奥方の嫉妬）に命を取る、事程はあらじ。此事聞せて国元へ帰せ」と仰せける。

典拠の流れに沿うならば、病に倒れた妻は夫に看病され、怪異から遠ざけられるはずである。ところが、「妖孽寛濶女」では、病に倒れた奥方は夫に捨て置かれ、恋敵である側室の方が怪異から遠ざけられている。また、奥方の本性を知った殿は「女の所存程うたてかる物はなし」と述べているが、これは源氏が六

条御息所の物の怪を疎んじ「女の身はみなおなじつみふかきもとひぞかし」(若菜下)と感じたのと同様の反応である。殿にとって奥方はもはや「守るべき対象」ではなく、もはや愛する者に害を及ぼす「物の怪」的存在に成り代わっているのである。

奥方が「嫉妬する紫上」をもとに造形され、その誇張された嫉妬に面白さがあることは先に述べたが、西鶴のねらいは、紫上のパロディとして奥方を描きつつ、その嫉妬を「六条御息所を凌ぐレベル」にまで誇張してみせるところにあったのではないだろうか。怪気講三番目の語り手(袖垣殿)は六条御息所を思わせる、とことん嫉妬深い女性であった。ところが、一代女がさらに激しい嫉妬の演技を見せ、その後奥方が内に秘めた嫉妬を語るに及んで、実は奥方こそが最も激しい嫉妬心の持ち主であったことが判明する。西鶴は、それに見合う結果として、奥方が殿に「物の怪」並みに疎んじられるという衝撃の展開を描いてみせたのである。

さらに、西鶴はこの話の結末を次のように描いている。

殿も女はをそろしくおぼしめし入られて、それよりして奥  
に入せ給はず、<sup>①</sup>(※奥方は)生別れの後家分にならせ給ふ。

(※私<sup>②</sup>一代女は)是を見て此御奉公にも氣を懲し、御暇  
申請て出家にも成程のおもひして又上方に帰る。

傍線部①の通り、奥方は事件後「生別れの後家分」となる。そして、傍線部②ではそれを見た一代女が「出家にも成程のおもひ」で奉公を辞めたとある。ここから想起されるのは、「紫上の出家願望」である。

・「いまは、かうおほぞうのすまゐらなれば、のどやかにをこ  
なひをも、となん思ふ。(略)さりぬべきさまに覺しゆる  
してよ」と、まめやかに聞え給折／＼あるを……

(若菜下・冷泉帝の退位後)

・「いとゆくさきすくなきこゝちするを、ことしもかくしら  
ずがほにてすぐすはいとうしろめたくこそ。さき／＼も  
きこゆること(※出家)いかで御ゆるしあらば」ときこえ給。

(若菜下・紫上が三十七歳の厄年を迎えた後)

右のように、紫上は、出家の願いを度々源氏に訴えていた。しかし、源氏は紫上との在世の別れに耐えられず、断固としてそれを許可しなかった。<sup>④</sup>

この点を念頭に置いて、「妖孽寛濶女」の結末を見直すと、出家を望む紫上が源氏の愛情により尼になれなかったのに対し、奥方は出家を望んでもいないのに、殿の愛情消失によって「生き別れの後家分」——尼同然の身になってしまっている。一代女の「出家にも成程のおもひ」から「紫上の出家願望」を

連想すると、このようにして、紫上と奥方の行く末の違いがより明確に浮かび上がってくる。西鶴は典拠をそれと暗示しつつ、その話の流れを覆して話を進めるといふ手法を多用していたが、そうした仕掛けは話の終盤にも活かされていたといえよう。最後に、「妖孽寛濶女」の幕切れについて考えてみる。

さら／＼せまじき物は愠気、是女のたしなむべきひとつなり。

西鶴は「二代女が上方に戻った」というところで話を終わらせず、右の一文で話を締め括っているが、それは一体なぜなのか。実は、若菜巻にもこうした「嫉妬への戒め」が見られる箇所がある。

「…まだきにさはぎて、あいなき物恨し給な」と、いとよくをしへ聞え給。(若菜上)

源氏は女三宮の降嫁について打ち明けた際、恨む様子を見せ

<p>若菜上</p> <p>六条院での貴公子達の蹴鞠</p> <p>『源氏物語』若菜巻</p>	<p>踏襲</p> <p>浅草の下屋敷での女中達の蹴鞠</p> <p>『好色一代女』巻三の二</p>
<p>若菜上下</p> <p>女三宮に嫉妬する紫上</p>	<p>踏襲</p> <p>側室に嫉妬する奥方</p>
<p>紫上、嫉妬を制御する</p>	<p>逆転</p> <p>奥方、嫉妬を制御できず怪異を招く</p>

ない紫上に安堵しながらも「事前に騒ぎ立ててつまらぬ嫉妬をしなざるな」と念入りに教訓していた。また、若菜下では、物の怪（六条御息所）が、娘（秋好中宮）への伝言として「ゆめ御みやづかへのほどに、人とぎしろひそねむ（※人と争い嫉む）心つかひ給な」と説く場面がある。ここから察するに、西鶴は典拠の主要人物が力説する「嫉妬への戒め」を幕切れに配し、それによって若菜巻を題材とする嫉妬話にふさわしい「オチ」をつけてみせたのである。

おわりに

本稿において、ここまでに指摘してきた趣向を整理すると次の一覧表のようになる。

若菜下	怪奇現象の発生（物の怪の出現） 紫上、物の怪に憑りつかれる↓病に倒れる	アレンジ	怪奇現象の発生（人形が動く） 奥方、人形に取りつかれる↓病に倒れる
若菜上下	六条御息所 伊勢の御息所と称される 嫉妬深い	踏襲	愷気講の語り手③…袖垣殿 伊勢の桑名の人 嫉妬深い
若菜上下	明石一族の繁栄	逆転	姪の衰弱
若菜上	明石入道 源氏と明石君の仲を取り持つ 醜い容貌	踏襲	愷気講の語り手②…明石に住んでいた女 姪と婿の仲を取り持つ
若菜上	末摘花 源氏は「昼は不都合なので夜訪れよう」と言うが結局訪れない	アレンジ	昼はもちろんな夜の契りも絶えて久しい 醜い容貌
若菜下	紫上、女三宮に雛人形のことを語る 紫上、明石女御の皇子のために天児を作る	アレンジ	奥方、愷気講に美女人形を用いる
若菜上	紫上、「中の戸あけて」女三宮と対面	アレンジ	美女人形、「真木の戸を明て」取り出される その戸に「しだれ柳」の意匠あり
若菜上	柏木、女三宮を垣間見し、見とれる	踏襲	一代女、美女人形に見とれる 一代女、側室に見とれる
若菜下	紫上、女房たちと夜更けまで物語を読ませる	アレンジ	奥方、女中たちと夜更けまで愷気講を行う
若菜上	紫上、女房たちと夜更けまで語る		

若菜下	源氏、物の怪の嫉妬を嫌悪する	踏襲	殿、奥方の嫉妬を嫌悪する
若菜上下	源氏、紫上のもとに足繁く通う 源氏、紫上を怪異から遠ざける	逆転	殿、全く奥方のもとに寄り付かなくなる 殿、側室を怪異から遠ざける
若菜下	紫上、源氏に度々出家願望を訴える	アレンジ	奥方、「生別れの後家分（出家同様の身）」となる 一代女、「出家にも成程の思い」で帰郷
若菜上	源氏、女三宮の降嫁を告げた後、紫上に嫉妬をしないようにと諭す	踏襲	結末部の教訓 「決してしてはいけないものは嫉妬」
若菜下	物の怪、娘（秋好中宮）への伝言として嫉妬をしないようにと話す		

この結果をふまえ、本章と他章の繋がりについて考えてみた。矢野公和氏は、『好色一代女』巻一の三「国主艶妾」に、武家の奥方は「下々のごとく、りんきといふ事もな」と記されているにもかかわらず、巻三の二「妖孽寛濶女」と巻三の四「金紙七髻結」にはそれと矛盾する内容（奥方の嫉妬）が描かれていることを挙げ、次のように述べている。<sup>15)</sup>

…これら三章は、表面的には平穩無事に治まっているかに見える大名や武家の奥向では、実はドロドロした愛憎劇が

展開されており、しかもそれは構造的なものであって、日常的に起り得るものであることを見事に描き切っていると云えるであろう。

つまり、西鶴は「武家の奥方は嫉妬などしない」という一般論を巻一の三に示しておき、巻三の二と巻三の四でそれを覆す嫉妬話を見せることにより、武家の奥向の「隠された真実」を意図的に暴き出しているというのである。

そして、本稿で新たに指摘したいのは、「武家の内情暴露的



性質」をもつ卷三の二と卷三の四が、先行作品の利用においても対をなしている、ということである。ここまで見てきたように、卷三の二の冒頭には「女三宮の垣間見」を連想させる「鞠」が配され、その話中には「垣間見」のパロディのほか、若菜巻を題材とする種々の趣向が組み込まれていた。一方、かつて拙稿で論じた卷三の四には「女三宮の垣間見」を連想させるもう一つの存在——「猫」（『類船集』に「猫—鞠の庭、みそめし俵、女三の宮」とあり）が登場し、その話中にも「垣間見」のパロディを含む若菜巻関連の趣向が散見した。<sup>(6)</sup>さらに、卷三の二では〈紫上と源氏〉にかかわる趣向が中心であったのに対し、卷三の四では〈女三宮と柏木〉にかかわる趣向が多く用いられるという特徴が見られた。

西鶴は、『源氏物語』若菜巻における二つのストーリーを読者に探索させ、その前後の場面にも目を向けさせながら、武家の奥方が登場する二つの章に隠された趣向を次々と発見できるように、実に巧妙に話を創っていたのである。

〈注〉

- (1) 『源氏物語』では若菜上と若菜下に巻が分かれているが、二つを併せ述べる際は、便宜上「若菜巻」とする。

(2) 前田金五郎「西鶴二題」〔大阪の歴史〕四〇、大阪市史編纂所、一九九三年一月、大阪市史料調査会。

(3) 谷脇理史「好色一代女」の自主規制——武家階層への諷諭の視点——〔国文学研究〕一二五、早稲田大学国文学会、一九九八年六月。

(4) 西鶴作品の本文は『定本西鶴全集』（頼原退蔵・暉峻康隆・野間光辰編、中央公論社）による。

(5) 『源氏物語』の本文は、早稲田大学古典籍総合データベース『湖月抄』（京都村上勘左衛門・延宝元年跋／文庫30・A0191）による。

(6) 『湖月抄』の本文は注(5)前掲『湖月抄』による。また、頭注の(細)は細流抄(抄)は一累年諸抄を勘へ合せて予(※季吟)が聞書に加るの説（『湖月抄』首巻「凡例」）である。

(7) 謡曲「鉄輪」には嫉妬する女が鬼と化して夫と浮気相手を呪い、呪い返しの茅人形を叩き据える場面がある。怪気講で女中たちが人形を攻撃するという設定については、こうしたモチーフも意図されていた可能性がある。

(8) 『類船集』に「人形—のろひこと」の付合がある。また、西鶴作「懐硯」卷三の五「誰かは住し荒屋敷」には、奥方に生き写しの姿絵に針が並べ立ててあるのを発見したお乳姥が

「さもすさまじき調伏（※呪い）の形、身の毛よだちて怖しく」と感じる場面がある（実際には雛型に針を留めてあったのだが、老婆はそれを呪いだど勘違いした）。こうした例も「対象を象つたものを害する」ことが呪詛とみなされていたことを裏付ける例といえる。

(9) 『定本西鶴全集二』（頼原退蔵・暉峻康隆・野間光辰編、一九四九年、中央公論社）「好色一代女」頭注他。

(10) 島内景二「嫉妬する末摘花」（国文学 解釈と教材の研究）三八―一、学燈社、一九九三年一〇月

(11) 『花鳥風月』本文は『室町時代物語大成三』（横山重・松本隆信編、角川書店、一八七五年）所収慶長元和頃古活字版による。ただし、読みやすさに配慮し、平仮名を適宜漢字に改め、句読点の位置を変更した。

(12) 『対訳西鶴全集三 好色五人女・好色一代女』（麻生磯次・富士昭雄訳注、一九七四年、明治書院）「好色一代女」後注他。

(13) 卷三の三で一代女は真つ当な尼でなく、「歌比丘尼（売業の尼）」となる。卷三の二の最後に配された「出家にも成程のおもひ」は次章を一層面白く読ませるための仕掛けとしても機能していたと考えられる。

(14) 物の怪の出現後、源氏は紫上を汲んで頭頂の毛を

「しるしばかり」切らせるが、そこでも五戒（在家信者が守る戒律）のみしか受けさせなかった。

(15) 矢野公和「懺悔としての身の上咄——『好色一代女』論——」（共立女子短期大学文科紀要）三八、共立女子短期大学文科、一九九五年二月

(16) 長谷あゆす「『好色一代女』卷三の四「金紙ヒ髻結」考——西鶴の『源氏物語』利用をめぐって——」（国語国文）八四―一〇、京大文学部国語学国文学研究室、二〇一五年一〇月、臨川書店

\*作品・資料の引用に際しては清濁・字体・句読点の表記を改め、一部を除いてルビを省略した。また、括弧類を補い、括弧内に※を付す形で適宜文脈を補う注を付した。

（はせ あゆす／大阪樟蔭女子大学専任講師）